

ヤクルトが4勝2敗でオリックスを破り、20年ぶりに日本一となった今年のプロ野球。セ、パ両リーグの覇者が激突した日本シリーズでは両チームに本県出身者が在籍するなど、例年以上に注目が集まった。

ヤクルト20年目、41歳の大ベテラン石川雅規（秋田商高―青山学院大出）は2勝1敗で迎えた第4戦に先発し、真価を発揮した。直球は130キロ台ながら、低めに決まる多彩な変化球とのコンビネーションで凡打の山

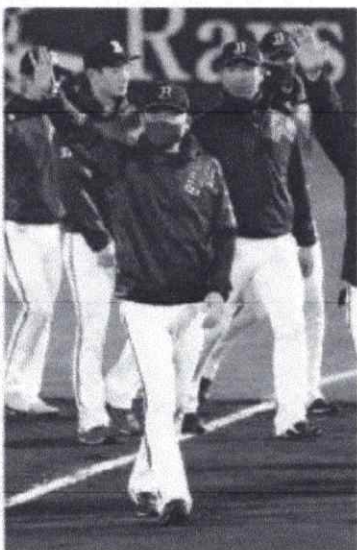
プレーバック 2021

① 秋田スポーツこの1年

県出身者、日本Sで激戦

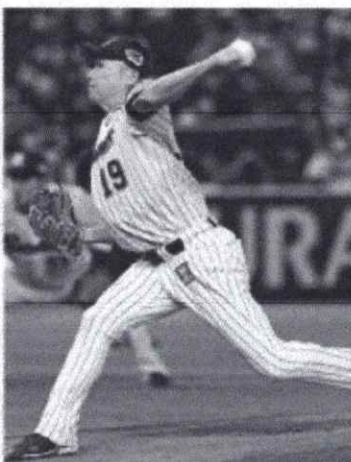
プロ野球

ヤクルトに敗れて日本一を逃し、ファンに手を振るオリックス・中嶋監督。ほととと神戸



を築いた。6回を3安打1失点（自責点0）。シリーズ史上2人目となる40代での勝利をマークした。

シーズン中からヤクルトのブルペンを支えた石



日本シリーズ第4戦に先発し勝ち星を挙げたヤクルト・石川＝東京ドーム

山泰雅（金足農高―東北福祉大―ヤマハ）は第3、4戦で好救援。特に第3戦では、3―4と勝ち越された7回2死満塁のピンチで登板。後続を三振に仕留め、その裏の逆転

本塁打を呼び込んだ。八回も三者凡退に抑え、勝ち投手になった。

日本一は逃したものの、オリックスを率いた中嶋監督（鷹巣農林高出）の手腕が際立ったシーズンだった。昨季途中から監督代行として指揮を任されると、今季から監督に就任。11年ぶりに交流戦を制するなど徐々に力を発揮した。6月には37年ぶりの11連勝を記録し首位に立った。

2軍暮らしが長かった杉本裕太郎を4番で使い、球界屈指の強打者、3番吉田正尚との打線の軸を確立した。高卒2年目の紅林弘太郎を遊撃手に据えるなど、大胆な起用でチームを活性化。2年連続最下位のチームを25年ぶりのリーグ優勝に導いた。

（間杉大旗）

2021年の本県スポーツ界をにぎわせたさまざまなシーンを振り返る。8回続き。